
チョコレートランク

タカヤ モモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレイトランク

【Nコード】

N0939A

【作者名】

タカヤ モモ

【あらすじ】

食べ物を食べるのは生存のために必要。しかしこの主人公は食べ物を生存の手段として食べることを意識しない。それはどんな影響を主人公に与えるか…？

第2話オンリーユウ（前書き）

主人公の食事の根本的な考えを読んで頂けたら幸いです。

第2話 オンリーユウ

毎日の朝食。それはあってもなくても同じもの。

毎日の昼食。それはなくてはならないもの。

毎日の夕食。

それはつまらない日常から抜け出すためのエネルギーを蓄える時。食事の時間はしっかり決めて食べた方がいいとテレビで聞いた。

今のテレビって健康番組が多いから、ケツコウ自分の体に気を使おうかな、なんて思わせる。

でも実際はそんなこと気にしない。

食べたいものを食べ、嫌いなものは食べない。

なんてストレートな食べ方。人に対してもこうありたいぐらいだ。

私が好きな食べ物は特にない。

母は料理が苦手、私も料理が苦手、だから料理をしない。

母はストレートな生き方を選んでいる。家族のため、という行動はしない。

常に自分のために行動を起こすのだ。

私は別にそんな母にダメ出しなんかしない。だって私も自分のためだけに行動を起こすから。

そんな人生もいい：今まではそう思っていた。

私の誕生日が近付いた、3月2日に友達のマリが告白。そしてマリに彼氏が誕生。こうして3月2日はマリとユウのカップル誕生日になったわけだ。

マリは私によく彼氏の話題を持ちかけた。ユウの話だ。

「ユウってさ、BOAが好きなんだって。私も好きになろうかなあ。」

「じゃあ髪伸ばしたら？BOAって髪長いじゃん。それにマリに似合いそうだよ。」

「そう？じゃっ伸ばすー！！」

マリは笑顔一杯、夢一杯の女の笑顔で、私の元を離れて行った。彼氏がない友達と話をする、大体が、

「彼氏できるとさーあ付き合い悪くない？」と言ってくる。

私は別に気にしない。

マリの事も気にしない。

でもユウの事は気になった。

なぜなら幼なじみだったからだ。

小学生の頃、一番遊んでいたのはユウだった。

私はたまたまユウに電話をかけた。

「はい。もしもし、桜本ですが。」

「高柳です。ユウ君いますか？」

「ああ、リカちゃんね。元気そうね。ちょっと待ってね。」

電話の遠くでユウの声がした。

「もしもしリカ？」

「うん。」

「どうした？」

「別に何もないけど、あのさ、マリとうまくいってる？」

「まあね。」

「マリさースッゴク女の子！って感じでカワイイでしょ？私マリのこと好きなんだ。」

「だね。カワイイよな。特にあのクルクルパーマがカワイイよな。ふわふわあしてさ。お前とんなよ。」

「どうしよっかなあ…あれ？B O Aが好きなんだって聞いたけど…」

「B O Aも好きだよ。でも今のマリがもっと好き。」

私は胸が苦しくなった。これって裏切りだろうか？

私の誕生日が明日に迫った日。

マリから休日だというのにデートのお誘いが来た。

「リカ、今からあーそぼっ☆」

「今日？5時からバイトだから、それまでだったらいいよ。」

「全然オツケイ！じゃあ今から駅に待ち合わせで。」

「はいさ。10分位で着くよ。」

「うん。じゃ後で。」

駅に着くとマリがチョココンと私を探して辺りを見回していた。

「マリー！」

私は少し遠くから大きな声でマリを呼んだ。

マリは子犬のような瞳で私を見付けると、チョコチョコと向かってきた。

「ありがとう！」

「いいえ、いいえ。」

そうして私達は落ち合い、近くの喫茶店で話をした。
ミルクティーとブレンドコーヒーがテーブルに並ぶ。
マリはいつもと変わらず人なつっこく私に話しかける。
私はマリの話に頷き、一言二言話す。

「リカは私のお母さんみたいだね。」と、子どもっぽい笑顔で私に言った。

その瞬間、胸が苦しくてユウを思い出す。
リカに悟られると思って必死でユウを消す。

「リカってさあ、チョコレート好きでしょ。」

「そう？」

「だってよくコンビニに行くと買ってるじゃん？」
マリの前でユウを思うことが苦しくて、いつの間にか話が上の空になっていた。

「チョコレート好きじゃないの？」

「えっ？ うーん。別に気になった事ないから分かんない。」

「えー、それおかしいよ。好きか嫌いかも分かんないの？」

「うん。」

マリは私とユウの関係を知らない。多分、ユウは言っていない。

マリの顔、ユウの顔、私の頭ん中はぐちゃぐちゃだ。

私は4時30分になるマリと別れ、バイトに直行した。

バイトに向かう途中、私はマリから言われた言葉を反芻した。

「お母さんみたいだね。」

「チョコレート好きでしょ？」

「好きか嫌いかも分かんないの？」

分らない。

チョコレート好きか嫌いか分かんないよ。

マリも好きか嫌いかも分かんない。ユウを好きか嫌いかも分かんないよ。

マリ、お母さんの気持ち知ってるの？私とユウは小さい頃仲が良かったんだよ。知ってる？

そんなことを頭の中のマリに向かって、質問してみる。

答えは帰ってこなかった。

第2話オンリーユウ（後書き）

この後は主人公が食事から生き方を考える？

第2話 オンリーユウ

バイトから帰宅して、すぐ自分の部屋のベットに横になった。

「なんにもない、なんにもない、なんにもない…」

聞いたことのあるCMの歌を口ずさむ。

なんにもない、そう、なんにもないのだ。

私はなんにもない、なんにもない、どこに行っちゃったんだろう？

あのバカは？ Ch a r aの曲にあったけ…どこにいったんだろう

？あのバカは。

私はどこにいったの？

毎日、どうでもいいよ。そんなことばっか言ってた私に、ツケが回ってきたのだろうか？

「今日の昼ごはん何食べたっけ？」

こんなだから…こんなだからユウとマリに挟まれて、苛まされて、四苦八苦してるの？

「私は何が好きなの？」

「私は何が嫌いなの？」

「私は何が食べたいの？」

「私は何をしたいの？」

「私は、私は何をどうしたいの？」

そう、私は私の気持ちが変わらないのだ。

なんにもない人間になってしまった。

今まで17年間生きていた。

なんかこんな風に言うのは可笑しいけど、本当に17年間、ちゃん

と生きて来たのだろうか？お母さんは、私をなんで生んだんだろう？
こんな苦しみがあると分かたって、私を生んだのだろうか？こ
んな思いをするって、分かってたの？

目から止めどもなく海水が流れる。涙って、しょっぱいなあ。

17年間のツケ、私は私がいけないことを知った。

第2話 オンリーユウ

誕生日を迎えた朝。

私は泣きながら、いつしか眠ってしまった。

泣きすぎて顔が腫れている。

時計の針は6時を指している。

何て最悪な誕生日の迎え方だろう、私はしばらくボーッとしていた。まるでエネルギーが空になったみたいだ。

「……………朝か。」

そう呟いた私の視線におにぎりが飛込んだ。

「おにぎり？」

私の机にちょこんと並んでいる2つのおにぎりたち。その時お腹が、「ぐううっ。」

と鳴った。私はお腹が空いて起きたのか？昨日帰ってすぐ自分の部屋に入ってしまったので、晩御飯は食べなかった。だからお腹はペコペコ状態。

「緊急指令！至急、おにぎりを食べよ！」

と私の脳は体に電気信号を送った。

私の体は素直に命令に従い、おにぎりをガッツと掴んで口よ開けと言わんばかりに押し込む。

おにぎりの味を確かめる暇はない。

そんなにお腹が空いていたのかと思うぐらいの速さでおにぎりを2つ食べ終えた。

「おいしかった。」

そんな言葉がぼろっところぼれた。

そして次の瞬間、母を思った。

このおにぎりは母からの贈り物だ。

そう気付くと、いても立ってもいられず台所へ急発信。

エネルギーを蓄えた私の体は勢い良く扉を開け、台所へ続く道を走

る。

まるで動物。そして台所に着くと母が、なんと、朝御飯の支度をしていた！

「はぁ、はぁっ、おっお母さん？」

「あぁ、おはよう。何息切らしてんの。」

あんたのせいだよ！と思ったが口にしない。

「はぁ、あっあおのさ、おにぎり、ありがとう。」

「リカすぐ部屋に行っちゃったから、お腹減らしてるだろうって思ったのよ。だからおにぎりこしらえてみたわ。」

奇跡だ。

「アタシ寝てた？」

「グーグー寝てた。疲れてたんでしょ。」

そうだよ、物凄く疲れて疲れて、空になってたよ。

「うん。」

「食べたの？」

おいしかったよ、お母さん。

「食べた。」

「そう。久しぶりにおにぎり握ったわ。もう朝御飯出来るから。」

すっごく、不格好なおにぎりだったけど本当においしかったよ。

「・・・・・・・・」

なんだろう？体全体が満たされるようなこの感じ。

お母さんがフライパンを握ってるから？違う、私が久しぶりに朝からおにぎり食べたから？違う。私が空になったから？違う。

答えは、全部だ。

久しぶりに満ち足りたこの感じ、お父さんがまだいた時以来だ。

そして、お母さんが料理を始めたのも、お父さんがいた時以来だ。まるでお父さんが生きていて、これから3人で食事を取るみたい。けれど、私は何も聞けなかった。

料理を始めた理由も父との思い出も。

私は母が怖かった。

また母が父を亡くした時の様になってしまいうんじやないかと、毎日びくびくしていた。

母は父が亡くなってから1年間は、何もせず、話もせず、ただ黙って父の遺影を見ては泣いていた。

だから私はいつでも、母が消えてしまいうんじやないか、死ぬんじやないか、という不安に絡まれた。

けれど、祖母から精神科に通わせられ、母が毎日日記を付けるようになってから、徐々に、ほんの少しずつ、母は変わっていった。

ただし、父がいた時の以前の母とは決定的に何かが違っていった。私自身も、だ。

お父さんとお母さんと私の構図。

それはささやかな幸せの構図だった。

私は父が亡くなった時程悲しかったことはない。

が、それ以上に母の姿を見て私は余計、父があけた穴の大きさに気が付き茫然とした。

第2話オンリーユウ（後書き）

ご観覧ありがとうございました。次はもう少し主人公の過去を掘り下げてみます。

第2話オンリーユウ（前書き）

続きを書くのが遅れました！すいません？待ってた人いないかなぁ…
な。まっ！見てくれたら嬉しいです。感想よければお願いします。

第2話 オンリーユウ

私は母と二人だ。これからなんだ。

私はまだまだこれからなんだ。

私は母と二人でこれから始まるあたらしい生活を送る決心をした。それは決して楽だとか正しいとか、そんな判断を下すような問題じゃない。

この問題はずっと判断できないから苦しいこともあるんだと思う。私と母の時間は父が亡くなってから止まっていた。

けれど今日、新たな私と母は、止まっていた時計を合わし、動かした。もう、止まることはない。

父が倒れたのは、会社だった。

父はいつも仕事、仕事とおわれていた。

私は大変そうな父を見て、何も感じようとしていなかったし、なによりも家族より仕事の方が大切なんだと思っていた。

「KARUSHI」

これは父の死因。

日本が世界に発信した単語だ。

教科書の社会問題が目の前にされた時は何も言えなくなった。

「教科書の文字は実際に起こる。」

、ことを初めて実感したのもこのときだ。

リアルのないペラペラ分厚い教科書は、正確にじゃないけど、その時起こった事実を知らせてくれるのだ。

父の死。隣の猫の死。祖母の死。川辺に咲いていたたんぽぽの死。

私の落ちた髪の毛一本の死。死はそこら辺十にある。一杯あるけどそれを全然見てないし考えようとか受けとめようとかしない。今までそうやって生きてきた。

父は会社に

「KARUSHI」

と認められなかった。

会社の中で死んでいなかったから認定は難しいらしい。

私の頭の中では仕事中心の会社の中だったが父の仕事は“外回り”だったらしい。

私は母に詳しく聞くことができなかったので父の葬式の中で、親戚のひそひそ話に耳を立て、断片的に集め、組み合わせ、繋げて理解しようと努力した。

私は父がどうして亡くなったかが知りたかった。

少しの情報からどんな風に父が死んで行ったかを推測した。

父は昼の公園で、いつものように母の弁当を開き、箸をもっておかずを手をのばしたその時、バタリと、多分そうやって倒れたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0939a/>

チョコレートランク

2011年1月14日04時21分発行